

Title	揺れ動く地に立ちて、なお十字架は輝けり：東日本大震災の只中にある教会
Author(s)	松本, 周
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume28, 2013.3：169-183
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4459
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

揺れ動く地に立ちて、なお十字架は輝けり

——東日本大震災の只中にある教会

松
本
周

一 はじめに

いちじくの木に花は咲かず

ぶどうの枝は実をつけず

オリーブは収穫の期待を裏切り

田畑は食物を生ぜず

羊はおりから断たれ

牛舎には牛がいなくなる。

しかし、わたしは主によつて喜び

わが救いの神のゆえに踊る。

わたしの主なる神は、わが力。

わたしの足を雌鹿のようにし
聖なる高台を歩ませられる。

指揮者によって、伴奏付き。

(ハバクク書三章一七〜一九節・新共同訳)

今、共に聞きましたハバクク書は、預言書の中の一書です。神学校で学んでいた頃、授業でハバクク書が取り上げられたことがありました。そのときは、非常に遠い世界の出来事として読んでいました。ハバクク書三章を読みながら、「これは当時あつた大地震の描写なのだ」と教えられました。そんなものか、と聞いていたのが正直なところでした。けれども、私は三月一日以降、何度か被災地を訪問させていた。ただ中で、この聖書箇所が強くリアリティをもつて迫ってくる経験をいたしました。「ぶどうの枝は実をつけず、収穫の期待を裏切り、田畑は食物を生ぜず、牛舎には牛がいなくなる」。原子力発電所事故により全村避難となつた飯館村で、まさにそのような場所を見ました。今日はそのような被災地への訪問経験から、語らせていただきたいと思えます。皆さまが同じキリストの体として、被災地の教会を覚えてくださることを感謝しつつ、乏しい私の経験からではありますが、分かち合えたらと願っております。

二〇一一年三月一日、東京神学大学の卒業式に、私たち夫婦は出席していました。午後二時四六分は学長祝辞の最中でした。はつきりと覚えていきますけれども、近藤勝彦学長が「十字架を負うとは」と口にされたときに揺れ

が始まりました。揺れが収まるまで、数分でしたでしょうか、近藤学長が「今、十字架を負うとは、ということについて語っていました」と再開なさいました。そして、受難節に入った週の出来事でしたから、私はまさに、召命と献身ということを受け止める只中で三・一一に直面しました。

地震直後のことで、ぜひ覚えておきたいことは、海外の教会からの祈りと支援です。直後の一三日の主日、韓国セムナン教会では第一部礼拝から、日本と日本の教会を祈りに覚えてくださり、その祈りを洛雲^{ナグネ}海宣教師が日本語に訳してくださいました。日本基督教団のホームページへ掲載されたその祈りの言葉を通して、多くの者が励まされ、立ち上がる力を与えられました。教会は国籍や言語も超えて、一つなるキリストの体に結ばれていることを深く知らされた出来事でした。

様々な報道で、ご存じのように、地震直後からしばらくの期間は、関東辺りでも相当な混乱がありました。とにかくガソリンがない、停電はあるということ、物流も滞った状況で過しておりました。動こうにも動けないというのが最初の状況でした。いったい、どこの教会がどのような被害にあっているのか、情報もなかなか入ってきません。特に、福島県の浜通りの地域が一体どうなっているか、わかりませんでした。そういう中から最初の動きが始まり、私は祈りに押し出されるようにして、動き出しました。とはいっても、三月の最後になってやっといき入りを果たせました。

二 被災地訪問を通して

被災地訪問の経験、それは一言で表せば、「広範囲」でした。私が行ったところだけでも、茨城県、福島県、群

馬県、栃木県、岩手県、宮城県です。広い範囲に被災が及んでいるということが今回の特徴とされます。

まず三月三十一日に福島県いわき市の勿来教会なごそ、常磐教会じょうばん、磐城教会いわきを訪問しました。いくつかの教会から私のところに送られた物資を車に積み、茨城経由で向かいました。いわき市の教会を震災直後から支援して来られた島田進牧師（日立教会）がご案内くださり、嶋田恵悟牧師（土浦教会）が二日間の行程を同行くださいました。常磐教会の武公子牧師とお会いした際には、震災直後にライフラインが途絶し、食糧・飲料もなく、命の危険を覚悟したとお話を伺いました。また磐城教会には、私たちの到着と相前後して、日本ホーリネス教団からの救援物資を満載したトラックが到着しました。そして新年度から磐城教会へ着任された上竹裕子牧師もちょうどこの日、いきへ到着されました。

翌日は福島市へ向かい、福島教会、福島新町教会しんまち、信夫教会しのぶを訪問しました。福島教会の教会堂は歴史文化財に指定され、町の方々にも親しまれていました。しかし地震で、煙突部分に完全に亀裂がはいってしまった、余震によって煙突が倒壊すると、周囲の住宅を巻き込んでしまう恐れがあるということ、行政当局からの指導で解体をしました。礼拝の場所が突然なくなってしまうという経験でした。堀江知己牧師、嶋田恵悟牧師、私の三人で、ハバクク書三章を開き、祈祷会をしました。福島新町教会は聖学院と同じデイサイプルスを教派的伝統にもつ教会です。ここも会堂内外の亀裂、剥離、崩落が多くありました。『ごどもさんびか』に「どんなときでも」という讃美歌があります。この福島新町教会の教会学校の生徒、たった少女が作詞した曲です。まさにその曲の状況でした。そして信夫教会、数年前に耐震工事をしたばかりで、建物被害は軽微でした。けれども放射線量の問題が福島市を直撃していました。

五月には、「教団新報」主筆の竹澤知代志牧師（玉川教会）と一緒、群馬県の伊勢崎教会と桐生東部教会きりゅう、

栃木県の宇都宮教会、宇都宮^{つわま}上町教会、四條町教会と那須塩原教会、加えてアジア学院を訪問しました。

群馬県や栃木県の被害は、地震による建物の損傷です。既存部と増築部分の継ぎ目が壊れてしまっている、オランダの損傷などが各教会の状況でした。それから教会ではありませんけれども、アジア学院という日本基督教団の世界宣教のつながりにおいて大切な役割を果たしている学校があります。アジアやアフリカの方々が農業研修にいらして、有機農法など様々なことを学んでいらつしゃいます。そのアジア学院の敷地内では多くの建物が大きく損傷し、立ち入りの危険なレベルとなっていました。また原子力発電所事故の問題も、農業実習との関係で深刻でした。

七月に、常磐教会と白水^{しらみず}のぞみ保育園、南相馬市の原町教会と聖愛保育園を前田恭子姉（ACEF事務局長・田園調布教会員）・上竹裕子牧師（磐城教会）と共に訪問しました。アジア・キリスト教育基金（ACEF）というNPOがあり、バンングラデシユの初等教育の普及を支援する活動をしています。私は現在、評議員のひとりとなっています。今回の震災を覚えて、バンングラデシユの先生と子どもたちが義援金を寄せてくださいました。それを届けに参りました。

原町教会は原子力発電所から二五キロメートルです。聖愛保育園が緊急避難準備区域に入り、行政によると公的には保育はしてはいけない地域であり、公的補助金は出ないという話になりました。しかし、お子さんたちはまだ同じようにそこに生活していて、親御さんが仕事に行かれると、行き場がない状態でした。そのため、自主保育というかたちで公的補助金は出ないのだけでも保育を愛の業としてなさっている時でした。いちばん守るべき大切な子どもたちの命を守ることに、その働きを支えるということについて深く覚えさせられました。

秋になって岩手県釜石市、宮城県気仙沼市、石巻市、そして仙台と、夫婦で回りました。このとき津波被害の甚

大であった被災地を、初めて目の当たりにしました。石巻山城町教会には、今、関川祐一郎伝道師がおられます。二〇一一年四月に赴任なさった先生です。三月一日の卒業式の時、どうやら震源は三陸沖だと、津波が押し寄せたという刻々と入ってくる情報を彼も同じ場所で一緒に聞いていました。そして、大変な状況の中を、祈りつつ、彼は赴任していきました。

振り返ってみて、訪問できたのは被災教会の一部に留まっています。例えば、被害の大きかった新生釜石教会と大船渡教会などを私は訪問できていません。そのような意味でも、私の経験は断片的です。

そのような中で、常に意識にあったのは、全体教会としての日本基督教団の一枝として、被災地への訪問や、小さいながらも支援をさせていた、だくということでした。日本基督教団の教師として立てられている私が、一つの教会の責任を負うというかたちではないがゆえにある機動力をもてる、そのことを通して日本基督教団の教会へ奉仕させていた、だきたいと考えております。

三 被災状況の多様性

今回の震災による被害は、地震の揺れによる被害だけでなく、津波、原子力発電所事故、精神的打撃、環境変化など、多様であり複合的な状況がありました。そのことがまた、震災はなお続いていると考える方と復興の段階に入ったと考える方との認識の相違にもつながっていると思います。

環境変化というのは、直接家族が被災したということではなくても、勤め先が被災したとか、勤め先の東北にある工場が被災したとか、そうした連関で生活に深刻な変化をもたらすということです。

その中には節電の関係で、土日の休業を週日に振り替えるという自動車工場などのことがありました。私が居住している上尾にはトラック製造の大きな工場があったり、タイヤ工場があったりするのですけれども、やはり勤務しているクリスチャンの方々が、主日礼拝が守れない、出勤日に突然なつてしまったというところで、どのように受け止めるか、が教会の課題になりました。それぞれの教会で、夕礼拝を実施するようになった教会もありましたし、ウィークデーの礼拝をもつようになった教会もありましたし、ウィークデーの聖研祈祷会をその期間、礼拝という仕方にして守るなどの状況がありました。

被災と一口に言っても、こうした多様性と複合状況があり、認識の相違がある。それを考慮しないまま、東日本大震災の支援をどうしましょうかという大枠な話をする、自分がいま、どの位置に立って、何を発言しているのかわからない議論となり、すべてが混乱してしまうということも留意しなければならぬと考えさせられています。

四 信仰者として震災を受け止める——「教会に固有の言葉」とは

生活の根本にまで影響が及び、ライフスタイルそのものが変化を求められるときにあって、信仰者として何を受け止めるのが問われています。私が奉職しています聖学院では学校法人全体の教育研究課題として東日本大震災を直視していくと、牧師である理事長の阿久戸光晴先生がおっしゃられ、いま懸命にそれぞれの専門の研究分野から東日本大震災を受け止めるということが取り組まれています。私の専門は神学であり——この場合、神学と信仰は同義語ですが——教会に固有の言葉は何かと深く考えるようになりました。三・一一をどう捉えるかについて、文化人とか知識人、評論家など、様々なことを言いますが、教会がそれらと同じことを発言するのであれば、

別に教会である必要はなくなってしまう。教会に固有の言葉とは何かということが、深く真剣に問われなければならぬと思います。現時点で四つのことを考えさせられています。

一つは天罰論、「震災が神の裁き」との言い方に対して、教会は何を発言するかということです。列王記上の九章にエリヤが偶像崇拜をする王に追われて山の中に逃げ込むという場面が出てきます。そのときに、エリヤのまえに嵐があり、地震があり、火が通りすぎます。ところが聖書は「嵐の中に主はおられなかった、地震の中に主はおられなかった、火の中におられなかった」そう記し、主はその後に「声」をもってエリヤに語りかけられたと書かれています。そこで主は、「わたしがこれからのために残しておいた残りの者がいる、この残りの者たちが神の民を再建していく」というご計画をエリヤにお話しになります。地震が天罰だという声に対して、いや、そういうものの中に主はおられない。そのことを経験した後、私たちは経験をした者として主の御声をどう聞き取るのか、ということの中にあると答えるのが教会です。

二つ目、これも時折発せられる「神は死んだ」とか「もともと神などいなかった」、「神がいるならなぜ」という声があります。これはヨブ記の主題そのものであると思います。神に向かってなぜを問うヨブに対して、神は「お前はと思うのか、お前はどお受け止めるのか」と問われます。神の御業を人間が全て手に収められるのであれば、それは本当の神ではなくて人間に都合よく利用できる存在を、神と呼んでいるだけではないか。そうではなくて私たちの知識を超えたところにあつて、しかし確かに働いておられる神様の救いの歴史、経綸、救いのご計画に目を向けるべきで、それに向かって「なぜ」とか、「神はいないのではないか」と言っているのは、かえって神の救いの計画である経綸を人間が暗くしている（ヨブ記三八章）。神を見えなくしているのは人間自身だということです。ヨブ記の最後四二章で、ヨブは「自分を退け、悔い改めます」と、これは方向転換です。問うのではなくて、あな

たが私にどう生きよと仰せになるのか、そのことを聞き取って歩んでいきます、と方向転換する。神は、私たちにどう生きるかを問うておられます。イエス様ご自身が十字架上で「なぜ」と叫んでくださいました。この私たちの叫びを聞き取ってくださる方が確かにいらつしやるのです。

三番目に、「世の終わりは近い」「これで世界は滅亡する、そのような時期に入った」という声が、このような大震災があると必ず発せられます。しかし、マタイによる福音書二四章で、イエス様は世の終わりについて語られ、地震や戦争が起こることは「まだ世の終わりではない」とおっしゃられます。まだ世の終わりではない、とはどういうことか、それで「一貫の終わり」ではない、それが絶望ではないということです。人間の目にはもう全てが終わりだと見えるそのような場面においてもなお、神の御手の支えがある。神の救いが平安の根拠として、私たちに与えられています。聖書は、終末を世界の破滅として考えません。歴史が終わるのは、神の国に成るとき、神の国が完成するときです。だからこそ、「御国の福音はあらゆる民への証し、全世界に宣べ伝えられる。それから終わりが来る」と言われます。神の国が来る前の今は、何をすべき時かといえますと、ここにあるとおり、御国の福音を宣べ伝えるとき、伝道するときは、福音をまだ知らされていない人が、絶望だ、すべて終わりだと思つているところに、教会は「まだ終わりではない」との福音を届けます。なぜなら、死を超えて復活してくださった方が私たちと共におられるからですと語る。教会はその福音伝道の使命に生きます。

最後の四番目、教会にしかない出来事について語りたいと思います。世にはない交わりが教会にはある。「世にはなき交わり」讚美歌（五三三番）の歌詞ですけれども、それを語りそこに立っていくことを教会はこのときにこそ、再確認して進みます。何が教会にしかないのかというと、世にあっては決して一つにならない、一つになれない、一緒にはなり得ない人が、主の十字架と罪の赦しの福音のもとにおいては一つになれる、一つとされるとい

ことです。被災地の教会を訪問させていただく中で、経験した事がありました。教会の礼拝に、原子力発電所事故近くの地域から避難された方がいらつしやっていました。同時に、電力会社やその関連企業の方もその教会の礼拝に集っていらつしやいました。「世にはなき交わり」があります。およそ今の社会状況からして、そういう方たちが共に集っているという事はあり得ないことです。位相がまったく逆ですから。発電所の事故から避難しなければならなくなっておられる方と、事故の拡大を阻止し、電力供給に努力している方がそこにいます。そのときに教会で、巷間の社会批評をただ繰り返す仕方方で、言葉が発せられていいのか、と考えさせられます。

「全て重荷を負った人、疲れた人はわたしのところに来なさい、あなたがたを休ませてあげよう」と。イエス様が「全て」とおっしゃるときに、あの事故で住む家を追われ、新しい場所で生活を始めなければならなくなつた人の重荷をイエス様は負ってくださいるために招いてくださいます。同時に、あの事故ゆえに、その業界に属しているがゆえに、どこにいても非常に厳しい視線にさらされ、厳しく冷たい、そのような世間との関係にあつて日々の働きをなさっていて、傷つき弱っている、その疲れた人の重荷も降ろせる場所として教会は開かれています。そして私たち自身が持つている傷や欠け、時に言葉をもって自分と立場の違う人を傷つけてしまうようなそういう罪を抱えている私たちを、罪の赦しにより一致させてくださる場所として、主が教会を立てて、罪の赦しの洗礼と聖餐の食卓を与えてくださっている。そのことに生きる群れが教会です。世にはない交わりがここにはある。ここでは、全ての人がキリストのもとに重荷を降ろすことができる。その場所を立て上げていくこと、その使命に、教会は今この時こそ、生かされていきます。

コロサイ書四章六節で、「塩で味付けされた言葉で語りなさい」と言われています。これは清めの塩です。私たちの言葉に伴ってしまう罪の穢れを、キリストの塩によって取り去っていた、だいて言葉を語る。私たちにまわり

つく罪の不純物を、聖霊の火でもって精錬していただいて、主に清められた言葉を語るといふことの中に生きていきたい、そう祈ります。

五 支援のかたち——根本的に教会支援であり、礼拝支援

教会の成す支援とは何かを考えます。ボランティア活動が様々なかたちで展開されていることは大きな意味をもってきます。それと共に、その活動の信仰的根拠として、教会は根本的に教会を支援して礼拝を支援する。これはそれ以外をしないということではなく、一番中心にあるのは教会を支援すること、礼拝を支援することから全てが始まって、全てはそこに戻ってきます。

被災の地に教会が立ち続ける重大な意味があると、確信をもって語りたいと思います。なぜなら、教会に与えられているメッセージこそが本当の意味で人を生かすことができるからであり、罪と死を打ち破って人を生かすことのできる復活の言葉を、教会は与えられているからです。人を生かすとは、抽象的あるいは観念的なことに留まるのではなく、基本的な人権を守ることでもあります。その根源の意味を教会は知っている。だからこそ、被災地に教会が立て続けられていくことが、日本を本当の意味で生かし続ける道です。それを政治家が気づいていなくても、学者が気づいていなくても、教会は気づいていて語り続け、支援していきます。

「揺れ動く地に立ちて、なお十字架は輝けり」と講演題に致しましたが、これは聖歌の中にあつて関東大震災の際に作られた曲（聖歌三九七）の歌詞です。「遠き国や」から始まる、宣教師の詞、たと感慨深く思います。

1. 遠き国や海の果て 何処（いずこ）に住む民も、見よ

慰めもて変わらざる 主の十字架は輝けり

2. 水は溢れ、火は燃えて 死は手、広げ待つ間にも

慰めもて変わらざる 主の十字架は輝けり

3. 仰ぎ見れば、など恐れん 憂いあらず、罪も消ゆ

慰めもて変わらざる 主の十字架は輝けり

（折り返し）

慰めもて汝がために 慰めもて我がために

揺れ動く地に立ちて なお十字架は輝けり

冒頭で、震災におけるハバクク書のリアリティについて述べました。引用した聖書箇所的前半が被災状況のリアリティであるとしたら、引用箇所の「しかし」以下、後半のリアリティがこの歌詞によって語られています。

震災で揺れ動く地に立つてなお、十字架が輝いている。そのことに仕えていきたいと、私はこの曲を歌いながら祈ります。教会はキリストの体ですから、キリストご自身もこのために苦しんで仕えておられると思えるときもあります。その奉仕に私を招いて、あるいは私たちを招いて、主が用いてくださるのが支援ということす

から、これは光栄ある務めです。主が用いてくださる出来事というのは、いつも思いますけれども、主のご計画の時なので、私たち人間の側からすると思いがけない時に、思いがけない仕方です。何月何日から支援します、とはなりません。あるとき突然出会いがきっかけで始まる。それは避難をなさっている方が多くいらつしやる今の状況では、非常に思いがけない時にということが、日常的にあると思います。もう来週にでも教会の礼拝にそういう方がお見えになるということがある、ないとは言いきれない、あるのではないかと思えます。

そして献金による支援です。第二コリント書八、九章では、お読みくださるとおわかりいただけると思いますが、献金についてひたすら書かれてあります。どういう献金かというところ、エルサレム教会に飢饉があつて苦しんでいるのを他の地方にある教会が献金をもつて支えるという話です。非常に興味深いのは、パウロは一度も「献金」と言わないことです。献金という言葉が出てくるのは新共同訳で付された小見出しだけです。この小見出しは聖書本文にはありませんから、内容を要約して小見出しを付けると献金なのですけれども、パウロ自身は一度も献金と言わない。それが献金ということの本質を表しています。献金を考えるときに私はいつもこの箇所を読みます。その中で、一番中心にある聖句は第二コリント八章九節です。「主は豊かであつたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったので」。キリストの献身に支えられ、私がキリストの献身にたつたていくことが献金だということが言われています。

具体的には、日本基督教団にたつたる私たちの救援の献金は日本基督教団の救援募金に集約されていきます。目標総額は一〇億円です。一〇億円という金額は、各教会の会計の規模から考えますと桁が違います。しかし逆に言うと、日本基督教団の力を結集すれば一〇億円の献金が実現できるほどのキリストの体の広がりがあるということです。一七〇〇の教会・伝道所が力を合わせていくときに一〇億円献金は達成され、そこに現れるキリストの愛の

具体的な支え合いにより、教会が日本の社会へキリストを証ししていくことになります。

このことについて少し加えますと、能登半島で二〇〇七年に地震がありました。複数の教会が被災しました。輪島教会ですとか、羽咋教会と富来伝道所、七尾教会などが被災し、日本基督教団全体の献金で再建が始まりました。そのとき誰がいちばん驚いたかというところ、お寺のお坊さんたちだったという話です。あの辺りは、非常に仏教が強いところにもかかわらず、寺院再建のためのお金が集まりきらないときに、キリストさんはいち早く立ち上がったぞ、ということが、非常に地域でインパクトをもって受け止められたと聞きました。ぜひ、そういう祈りによる支援をもって、今回も主の福音を証ししていきたいのです。

最後になりますが、あの災害の中で、ご家族を失われた方々の悲しみ、なぜ自分の子どもでなければならなかったのか、なぜ自分のつれあいでなければならなかったのか、と抱えていらつしやる悲しみが、完全な方たちでその目の涙が拭いさられるのは、終末のときだと思えます。その前に、神以外の存在が神になりかわってその悲しみにはこういう意味があるなどと言うことはとてもできません。悲しみは悲しみとして、その時まで残らざるを得ないことであると思えます。なぜこんなことを申すかといいますと、その悲しみを抱え続けている方の悲しみに寄り添える者でありたいからです。寄り添えるという言葉が適当かどうかわかりませんが、つまりそのような悲しみは時間が増えて復興が進んでいきますとどんどん逆に押さえつけられていくところがあります。もう皆が復興に向かっているのに、あなたはなんでいつまでもよくよしているのか、という視線。全体が復興に向かっているという強い流れの中で、弱い声はどんどん小さくなって抑圧されていきます。そういうことが歴史上のいろいろな例で起こってきます。私は悲嘆と信仰に関する研究の一環として、広島・長崎の被爆者の方々の悲しみとか訴えを

収集していただけますけれども、その中にも悲しみに対する抑圧の力がやはり見出されます。そのようなとき、悲しみが置き去りにされてしまうことについて、心の深みからの共感を持ち続けられるのが教会の群れでありたい。なぜ共感を持ち続けられるかというと、終末の神の国の時に悲しみを全て拭い取ってくださるキリストがおられて、そのキリストが神の国の使者として私たちを今の現実の中に派遣してくださっているからです。私たちは、キリストの使者、神の国の外交官として今の歴史の中に遣わされています。涙を拭い去ってくださいるキリストのその愛のまなざしをもって、悲しみを抱えている方の悲しみに深く共感し、共に祈り、共に主の憐れみを求めていく、そのような歩みでありたいと願っております。

ご清聴ありがとうございました。

(本稿は二〇二一年十一月十三日、日本基督教団名張教会での講演に、加筆修正を施したものである。)

謝辞

小松博士牧師、小松愛子牧師、木村牧子氏、吉田久仁子氏、安藤果菜氏のご協力に心から感謝申し上げます。